

前言

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部アジア研究センター 公開日: 2024-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戸部, 健 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/0002000572

前 言

戸部 健

本誌は、令和二（2020）～四（2022）年度科学研究費補助金基盤（C）「グローバルな視野からとらえた日本の茶と茶文化に関する学問横断的研究」（20K12318 研究代表者：戸部 健）が満期となるに当たり、その研究成果の一部をまとめたものである。

本研究の起点は、2014年に戸部が静岡大学の同僚である今村直樹（日本近世近代史、現・熊本大学）らと始めた小規模な研究プロジェクトにある。国立大学の地域への貢献が求められるなかで、静岡県を代表する農産物である茶を中心とした共同研究ができないか、という考えからであった。その際に我々が課題としたのは、①日本茶を日本の視点だけでなく東アジアの視点から位置づけ直すこと、②そのために必要な史資料をより広範に収集する、ということであった。日本茶についての研究はこれまで膨大にのぼる。ただ、それらは「日本の茶業」「日本の茶文化」といった視点からのものが多く、そうした茶業・茶文化のありようを東アジアの視野から俯瞰した時、そこにどのような日本茶の特性が見えてくるのか。また、「日本の茶業」「日本の茶文化」といった視点から研究する場合でも、江戸時代から明治にかけての地方文書や、日本茶の状況が書かれた欧文資料など、これまで顧みられていない史資料もあるのではないかと。当時我々の間でそのような疑問が浮かんでいたことが、上のような課題を設定した背景にあった。とはいえ、そうした課題に取り組むためには、より多くの研究者の助けが必要であったため、各方面に働きかけたところ、日本近世史、とりわけ静岡地域を中心とした茶業について業績のある岡村龍男（島田市博物館（当時、現・豊橋市図書館））と、中国近現代経済史を専攻する吉田建一郎（大阪経済大学）を新たに加えることができた。こうした学際的な布陣をもとに、「東アジアの視野からとらえた日本の茶と茶文化に関する学際的研究」というテーマで科研費に応募したところ、2015年に採択された。また、その成果を2018年に刊行した¹⁾。

その過程で、近世から近代にかけての日本（静岡・熊本）における茶の生産や流通のありよう、近代における日本茶のソ連輸出やそれらに関わったイギリス系貿易会社の動向、18世紀以降のイギリスと日本における喫茶文化の違いなどを、様々な史資料を用いて初歩的に検討することができた。他方で、研究を進めるなかで近代

1) 戸部健編『アジア研究・別冊7 東アジアの視野からとらえた日本の茶と茶文化に関する学際的研究』静岡大学人文社会科学部アジア研究センター、2018年。

日本の茶業史を専門とする粟倉大輔（帝京大学）や、イギリス文学を専門とする鈴木実佳（静岡大学）とも交流するようになり、より広い議論ができるようになってきた。そこで新メンバーを加えて再度「グローバルな視野からとらえた日本の茶と茶文化に関する学問横断的研究」というテーマで科研費に挑戦したところ、2020年に採択された。新たな資金を得て国内および海外（アメリカ合衆国やイギリス、台湾、中国）での資料調査を計画していたが、その前年から始まった新型コロナウイルス感染症（Covid-19）の流行のため、そうした調査のほとんどは国内を含め中止を余儀なくされた。特に海外での調査は完全に不可能となり、計画を大幅に修正しなければならなかった。

ただ、そのなかでも得たものはあった。それはインターネット上で利用できるオープンアクセス・データベースに対する知識が増えたことである。以前もそうしたデータベースを利用することは多かったが、この機会に徹底的に調べたところ、有用なものをさらに多く見つけることができた。それらを利用して得られたものは少なくないが、特に研究代表者の戸部にとってはアメリカ合衆国の茶業界誌である『ティー&コーヒー・トレード・ジャーナル』（*Tea & Coffee Trade Journal*）や『ザ・スパイス・ミル』（*The Spice Mill*）の多くの巻を閲覧できたのは大変な難かった。また、『ザ・スパイス・ミル』については、日本に所蔵がない1925年から49年の分を合衆国の古書店からインターネットを通して購入することもできた。

また、2021年頃から徐々に国内での調査ができるようになったことも追い風となった。それ以降、国内の各所蔵機関や旧家などにおいて茶業に関わる文書資料の閲覧・撮影などを行い、多くの収穫を得た。

もちろんそれでも限界は多々あったが、以上のような取り組みを重ねることでコロナ禍であっても何とか研究を前に進めることができたのである。

そのため、プロジェクト期間中、各メンバーは成果を論文や学会報告などのかたちで発表してきた²⁾。それらについては重複にもなるため本誌に掲載しない。ここに載せているのは、2024年3月段階における新たな研究成果である。簡単にその内容を日本茶の生産・宣伝・輸出・消費というテーマごとに紹介する。

茶の生産に主に焦点を当てて研究したのが今村直樹と岡村龍男である。今村直樹「幕末維新时期熊本藩の茶生産と地域社会」は、当該時期の熊本藩による茶生産奨励政

²⁾ 代表的なものを以下にあげる。今村直樹『近世の地域行財政と明治維新』吉川弘文館、2020年。粟倉大輔「茶業史における物流インフラの整備—静岡県事例を中心に—」『ふじのくに茶の都ミュージアム研究紀要・年報』2019、2020年。吉田建一郎「1930年前後の日ソ茶貿易」『大阪経大論集』71巻2号、2020年。岡村龍男「渋沢栄一と静岡—改革の軌跡をたどる—」静岡新聞社、2021年。Kimiyo Ogawa and Mika Suzuki eds, *Johnson in Japan*, Lewisburg: Bucknell University Press, 2021. 戸部健「J・C・ホイットニー社の広報パンフレット『ティー・トークス』(Tea Talks) について」『アジア研究』(静岡大学) 17号、2022年。

策の実態を知ることができる史料8点を紹介・翻刻している。それらは熊本藩の選挙方（藩の人事報奨制度を担当）が作成した年次記録帳簿群である「町在」からの6点と、熊本藩の惣庄屋文書である古閑家文書からの2点で構成されており、時代は文久三年（1863年）から明治二年（1869年）にわたっている。それら文書からは例えば、熊本藩において茶道方を中心に宇治製法の導入が長期的に取り組まれていたことや、それにともない各地に御茶園が設けられたり、茶実の無償配布がされていたりしたこと、百姓の余業として生産性の低い土地や河川の堤防などにも茶が植えられるようになったことなど、様々な事実が見て取れる。地域社会における茶生産の具体像を考える上で恰好の史料群と言えるだろう。

このように、殖産興業の観点から、幕末以来日本各地では茶生産がいつそう盛んになったが、そうした茶の多くは海外、とりわけアメリカ合衆国などに輸出された。ただ、輸出された茶のなかには粗悪なものも少なくなく、しばしば合衆国において批判の対象となった。茶の評判下落はその売り上げにも直結するため、日本としても茶の品質向上に力を注いでいくことになる。岡村龍男「大正期の静岡県における製茶の実態—製茶監督員河村宗平の指導記録を中心に—」は、明治四十五年（1912年）から大正十一年（1922年）まで静岡県の製茶監督員をつとめた河村宗平の事績や、彼の眼から見えた当時の製茶情況などを、河村家文書などから丹念に追ったものである。静岡県では明治の早い段階から国よりも厳しい規制を設けることで静岡茶の品質向上に努めていたが、その際、茶産地を巡回し、取締や製茶指導などを行う製茶検査員、およびその上役である製茶監督員の存在は重要であった。本論文は、そうした人々の具体的な動向を河村宗平を中心に明らかにしただけでなく、彼らと静岡県における機械製茶本格導入との関係についても検討した画期的なものである。

他方、茶の対外宣伝や輸出に主に焦点を当てて研究したのが戸部健と吉田建一郎である。先述したように日本茶の輸出量は幕末以来増えていき、1870年代半ばに合衆国への緑茶輸出量第一位の座を中国から奪った。ただ、明治二十四年（1891年）をピークに徐々に輸出量が減少し、大正六年（1917年）には第一次世界大戦に伴う特需による一時的な好況を迎えるものの、その後は本格的に低迷していく。それを受け、岡村が検討したように、更なる品質向上を目指す動きが見られたが、その一方で、合衆国での日本茶のイメージアップをはかるべく、大々的な宣伝活動が行われたこともこれまでの研究から知られている。そうした宣伝においては合衆国の茶業関係者の一部もそこに関与していたが、彼らと日本の茶業関係者との間では認識の共有ができていたのだろうか。つまり、彼らが合衆国で売れたかったのは、日本茶だけだったのだろうか。戸部健「1910～20年代のアメリカ合衆国における中国茶の宣伝—ハリソンズ&クロスフィールド社系企業との関わりを中心に—」は、日本茶と同様、当時合衆国で苦戦していた中国茶の宣伝のありようを、合衆国の茶業

界が刊行した書籍や雑誌などをもとに検討した。そして、日本やインドなどと異なり、当時中国では政府をあげて合衆国への宣伝攻勢をかけるようなことをしていなかったこと、またその代わりに合衆国において中国茶の魅力を発信していたのは合衆国の茶業界の人々であり、とりわけ当時合衆国を代表する茶業者のひとつであったアーウィン・ハリソンズ&クロスフィールド社、およびその関連会社の関わりが小さくなかったこと、などを明らかにした。そのうちアーウィン社は当時日本茶を最も合衆国に輸出していた会社であり、かつ先述の合衆国での日本茶宣伝活動にも深く関わっていた。つまり、同社が合衆国で売りたいかったのは日本茶だけではなかったのである。この意味をどう考えるかは今後の課題となる。

このように、1920年代の合衆国では日本や中国だけでなくインド、セイロン、オランダ領東インドなどの茶に関する宣伝が盛んに行われた。ただ、インドやセイロンが売り込んだ紅茶を前に、日本や中国の緑茶は徐々に敗退していく。そこで日本は北米以外の輸出先を模索するようになった。その結果、20年代後半以降になると日本茶はソ連や北アフリカ（とりわけモロッコ）などにも多く輸出されるようになった。ただ、そうした地域は、以前から中国茶の主な輸出先であった。つまり、新販路において日本茶が輸出量を伸ばすためには、現地で普及していた中国茶からシェアを奪い取る必要があったのである。吉田建一郎「日本茶のモロッコ向け輸出に関する『茶業界』の記事目録（1930年代）」は、静岡県茶業組合連合会議所が刊行した雑誌『茶業界』に1930年代に掲載されたモロッコ向け輸出関連記事について紹介したものである。先行研究でも言われているように、全体的に見れば1920年代末から30年代にかけて日本茶のモロッコ向け輸出は増えていったが、実際には年度によって増減が激しかった。その背景には当然ながら日本とモロッコ双方の事情があったことが考えられるが、吉田はその他に中国茶の動向も重要であったと予測している。そのため、目録には中国茶に関する記事も収録している。この目録を基礎に、当該時期の日本茶のモロッコ輸出に関する研究がさらに進むことが期待される。

最後に、茶の消費に主に焦点を合わせて研究したのが鈴木である。国や地域によって、好んで飲まれる茶の形態が様々であることはよく知られている。では、「何のために茶を飲むのか」、すなわち茶を飲む目的という点についても場所によって違いがあるのだろうか。鈴木実佳「『お茶ある限り希望あり』？」は、この問題を、イギリスやアメリカ、および中国や日本の人々によって8世紀以降に発せられた、茶に関する名言を比較しながら論じた。そして、中国や日本においては古くから喫茶を健康・長寿・不老不死に結び付けて論じていたが、イギリスやアメリカにおいてはそれを即時的な平穏、幸せ、落ち着き、安心、さらには人とコミュニケーションをとる喜びと関連させて認識していた、ということを明らかにした。つまり、茶を飲む目的についても、国や地域によって違いが見られたのである。今後の日本茶輸出の

あり方を考える上でも参考になろう。

以上、本書に掲載されている諸論考を日本茶の生産・輸出・宣伝・消費というテーマごとに紹介してきたが、そこからおぼろげながら見えてきたのは、近現代において日本茶の国内外での消費量が増減した背景には実に多くの要素が関わっていたということである。輸出量を増やすべく、茶の品質向上のための努力が日本の茶業界でなされたものの、輸出先の茶市場の動向や、茶を飲む人々の嗜好によっては、その努力が十分に報われないことも多かった。逆に、世界の茶市場の状況によっては、品質がそれほど良くなくても日本茶がたくさん売れることがあった。結局のところ、日本茶輸出の増減は日本国内の要素だけでは語れない、という至極当たり前のことの一端が見えてきたということだろう。それぞれの時代において日本茶の輸出がなぜ増えたのか／増えなかったのか。その背景を十全に明らかにするためには、茶の生産から宣伝、輸出、消費に至るまでの流れを一体的に、かつグローバルな視点から見つめなおす必要があると考える。今後はそうした各要素についてより深く検討していきたい。また、その成果は今後の日本茶輸出のあり方を考える際の材料にもなるだろう。

なお、本書に掲載された各論考の内容は、文章化に先立ち、2023年3月25日に静岡大学で開催されたシンポジウム「グローバルな視野からとらえた日本の茶と茶文化」にて報告された。当日足をお運びいただき、貴重なご意見を下さった皆様に厚くお礼を申し上げます。